

大赤見の「小字」名について

北小淵 吉田光良

大赤見の「見」は、古語で「水」を意味するといわれる。従って「赤水」ともいわれ、この地域の地下水が赤い水、“そぶ水”ではなかったかと考えられる。

一般的に「小字名」は、その地域の「地形」や「方位」や「寺社」に関係する名称が多いが、この大赤見には「^{じない}地内」、「^{じげ}地下」、「屋敷」、「市場」など、他の地域にはあまり見られない珍しい「小字名」が残存している。これらについて少し考察してみる。

①大赤見城

大赤見城は、比較的川幅があり北から南へ流れる用水（「大赤見用水」）の東側、西大赤見村の西堀田（現在の富士連区の「赤見2丁目」）の辺りにあったといわれる。この辺りは現在でも道路から1メートルほど高くなっており、一帯は高台で築城に適した場所だったと考えられる。

大赤見城は、『尾張志』では織田興七郎の居城といわれ、『尾張名所^{めいしよずえ}図会』では織田弾正左衛門勝久の居城といわれる。勝久は織田信長より五代も以前の人なので、築城は戦国時代より前の室町時代中頃といえる。その頃は、敵を防ぐ対策は比較的重要ではなかったのか遺構や石垣などは全く見当たらない。

勝久には二人の男子があり、弟の敏仁があとを継ぎ、敏豊—^{とよあき}信久—豊興と続いたといわれる。豊興は織田小平太ともいい、母方の姓の「服部」を名乗って織田信秀に仕えた。その子忠次が服部小平太で信長に仕え、永禄3(1560)年桶狭間の戦いで敵将今川義元に一番槍をつける勲功をあげたといわれる。（異説あり）

その後、「服部」家は家康の部下となり、天正18(1590)年の小田原の役で功を立て尾張に戻り、その子孫が赤見村に土着し、代々庄屋を務めたといわれる。

天保 12(1841)年のこの地方の古地図を見ると、近隣の北小湊村や柚木畠村の村絵図では「庄屋 繁蔵」、「組頭 幸助」などと書かれているが、大赤見村の村絵図では「年寄庄屋兼 服部弾輔」、「庄屋 服部喜左衛門」、「組頭 増右衛門」などと書かれていて、大赤見村は少し格が違うようである。大赤見には、現在でも服部姓が数軒ある。

第 2 期として再築された大赤見城は、天正 12(1584)年の「小牧合戦」の防備用として建造されたもので、第 1 期のような居住性はなく戦闘城であったといわれるが、その後廃城になってしまった。

②城下町の証

大赤見城は旧「西大赤見村」の南端にあったが、一本道を隔てた旧「東大赤見村」には、今でも「地内市場屋敷」という小字がある。「地内」は大赤見城区域内を意味しており、比較的身分の高い武士が住んでいたのではないかと思われる。また、浄土宗「常福寺」のあたりには「地下中屋敷」、「地下西屋敷」、「地下東屋敷」、「市場地下屋敷」、「市場東屋敷」などの珍しい小字がある。「地下」は昇殿を許されない官人を意味し、下級武士が住んでいたところで、「地内」、「地下」は城からの距離や住民の階級を表していると思われる。小字の中に「市場」とあるところは城下の賑わいを彷彿させ、近隣から人びとが集まり定期的に物品の販売や交換が行われていた所ではないかと思われる。

何れにしても、500 年近くにわたり続いてきたこれらの小字名は、往時の「大赤見村」の様子が伺い知れる貴重な小字名である。今後、行政により区画整理が行われたとしても未永く保存すべき小字名ではないだろうか。

余談になるが、大赤見には他所の村と比較して神社が多い。「^{くにたま}國玉神社」、「神明社」、「日吉社」、「諏訪社」、「八幡神社」、「富士社」など、昔の大赤見の繁栄ぶりを推察できるように思われる。

